

# 石狩市浜益区に見られる動物伝説と信仰の一例

Animal legends and beliefs in Hamamasu ,Ishikari City

坂本 恵衣\*

Kei SAKAMOTO\*

## 要旨

石狩市内の特に厚田区・浜益区には明治期に本州より流入したとされる龍神信仰が残されている。本文では、浜益区で昔から語られる伝説に由来する神社の事例について紹介する。

キーワード：浜益，尻苗，蛇，龍神，御霊

## 1. はじめに

石狩市は西側が海に面し、石狩川も流れているため、漁業や水辺に関わる仕事を生業とする者も多く、現在でも漁村に関連する文化が残っている。そのため、旧石狩市域・厚田区・浜益区いずれの地域においても、海や水辺に関する祭神が多く、特に厚田区・浜益区においては共通して龍神信仰が複数存在する。

一方で、「石狩市」は2005(平成17)年に旧石狩市、厚田村、浜益村が合併し現在の形になったため、開拓から合併までの期間に形成された文化には地域ごとに大きな差異が見られる。

本文では浜益区の龍神信仰の一例として、動物に関する伝説と信仰について考察する。

## 2. 浜益区について

浜益区は、石狩市の最北部に位置し、近世から近代にかけて鯿漁の漁場として栄えた地域である。幕末には、荘内藩によってハママシケ陣屋が置かれ、対外政策の要所としても重要な地域であった。本文で取り上げる「尻苗山八大龍神」は浜益区の

中でも南部にある「尻苗」地域に存在する。尻苗とは現在の送毛と呼ばれる地域に相当し、トンネル等の名称にも残されている地名であるが、送毛の中でも最南部で、隣接する濃昼との境界にあたることから、所在については濃昼と表記される場合もある。

## 3. 浜益区の伝説の例

浜益区に存在する伝承、昔話として有名なものの一つに「龍神」に関わるものがある。この龍神の話は2冊の本に掲載されており、それぞれ子供向けの絵本と学校史の中に記録されている。

また、この話は現存する祠との関係が明確に示されている事例の一つであり、当時の浜益区の信仰の一例について知ることのできる貴重な例と言える。

### A 「竜神さんの由来」

シリナエの浜から少し入った山に、大きなうろのあいたナラの古木があった。ある年の春早くまききりにのぼった若いものがその木のそばでたき火をしたところ、しばらくし

\* いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

て木のうろの奥から「ピーピー」と音がする。火をもせばもすほどはげしくなる。若いものことだからおもしろがってどンドンもした。火がおとろえたところ、ドサドサと大きな骨が落ちて来て、かますに二はいにもなった。みんなは「へびだ、大蛇の骨だ」とひじょうにおどろいた。

その後、火をもした若いものが病気になったり、漁が少なくなったり、おかしいことが続いたので、へびのたましいをなぐさめるために祠をつくってまつたのが、シリナエの竜神様だ。

(浜益村濃昼中学校閉校記念事業協賛会, 1992 : 70)

#### B「濃昼の龍神様」

濃昼とはアイヌ語で「滝つぼにしぶきが舞う」という意味なんだと。

ニシン漁で栄えて、「ヤン衆」は、ひと春に百円もの大金をかせいで、海をわたって帰ったそうだ

網元は、どっさりつくったニシン粕を「北前船」にのせて、津軽のほうさ、うりにいったもんだと。帰りは、いつも秋になってしまふんだと。

ある日、二人のヤン衆が、ニシン漁で使うカゴをつくろうと、山さのぼったと。

にわか雨が降ってきて、そばの大きな木の下で、寒ぐって、寒ぐって、火をたき、そのままにして山をおりたんだと。

夜になると、かみなりとともに、火柱が上がったんだと。

次の日にいってみると、ものすんごく大きな蛇の骨があったんだと。その骨を足でけり、そのまま村さ、帰ったんだと。

それから間もなく、二人は病気で死んでしまい、その網元もすぐに、つぶれちゃったんだと。

大蛇は、千年の修行を終え、天にのぼるはずだったんだとさ……。

(こだま会, 1992 : 7-8)

A「竜神さんの由来」ではシリナエ(尻苗), B「濃昼の龍神様」では濃昼という地名が記載されているが、上述したように尻苗周辺を濃昼と表記する場合もあり、同一の地域を指すものと考えられる(以降、2つの話をまとめて「シリナエの龍神様」と記載する)。

#### 4.「シリナエの龍神様」の伝説について

##### ①伝説にみられる要素

これらの伝承を要素で分解すると次のようになる。

- a. 若者が山で焚火をする
- b. 焚火を燃やし続ける(放置する)
- c. 火が原因で大蛇が死に、骨が見つかる
- d. 焚火に関わったものや地域で不幸が続く
- e. 事態を収めるために祠に祀る)

※ e の要素は B には見られないが、祠が実在するため、要素として記載する。

これらの要素から考えられることは、この「シリナエの龍神様」が御霊信仰に該当するものということである。

御霊信仰は次のように定義される。

「社会的に広範な範囲の人々を脅かすような災厄の発生を、霊鬼的存在である御霊のしわざとみなして恐れ、かつこれを鎮めることによって平穏を回復し、ひいては繁栄を実現しようとする信仰。」(國學院大學日本文化研究所編, 1999 : 339-340)

## ②石狩市における「シリナエの龍神様」の希少性

石狩市，特に厚田区・浜益区において龍神信仰は古くから存在し，龍神堂と呼ばれる建物，実際に龍神に関わる祭神や札を収める寺社も複数存在する。

寺院等に見られる龍神信仰の形跡の多くは龍神を本尊，主神として祀るのではなく，漁業を生業としていた地域住民が各家で信仰していたものが時代の経過とともにご神体が寺院に納められるようになった例，その地域全体で龍神を信仰していたために，寺院にそれらの祭神も共に祀られるようになった例が主である。

一方で，寺院ではない民間信仰（神職不在）の祠の多くは，地域で小祠を建立し，ご神体も仏像等ではなく掛け軸や木製の彫像，生き物のはく製と思われるご神体など多岐にわたる。成り立ちが判明しているものでは個人が祀り始めたものが地域の信仰として残され定着していった例が多く，詳細が不明なものも存在する。しかし，それらを含めた場合においても，御霊信仰から信仰が始まったとみられる事例は「シリナエの龍神様」以外には確認されていない。

また，御霊信仰というとは一般には「崇り」などの物語として残されることも多く，厚田区にも崇りに該当する伝承が残されているが，すでに存在する祠の移転に関する話であり，その信仰，祠の成立には関与しない。

そのため，複数ある龍神信仰の中でも「シリナエの龍神様」は，御霊信仰から始まったとされ，その成り立ちが地域の伝承として残された例として，石狩市内では唯一の事例と言える。

## 5. 尻苗山八大龍神社

尻苗山八大龍神は国道 231 号線に架かる龍神橋の山側（東側）に位置し，山の麓に鳥居と碑が存在する。祠は山に入った先にあり，旧道沿いに建てられたものと考えられる。祠横に手水鉢があるが，刻字はなく，奉納時期は不明である。

また，「八大龍神」というと仏教で信仰される八大竜王等を祀っていると解釈されることが多いが，この尻苗山八大龍神が仏教や神道で信仰されるそれらの龍神を示すものは定かではない。

儀式を行う神職は不在であるが，地元住民によって祠の環境整備，清掃等が行われている。

表 1. 基本情報.

名称	尻苗山 八大龍神社
所在	石狩市浜益区尻苗 (36 番地 2 地先)
創立時期	明治時代
祭神	八大龍神
例祭	なし
碑の建立時期	1992 年

(石狩市郷土研究会 石狩の碑厚田区編調査編集委員会, 2015: 20-21)



図 1. 尻苗山 八大龍神社位置  
(国土地理院地図に加筆)



写真1. 鳥居と石碑



写真2. 祠

## 引用文献

- 浜益村濃屋中学校閉校記念事業協賛会編, 1992. 濃屋郷土と学校の歩み. 浜益村濃屋中学校閉校記念事業協賛会
- 石狩市郷土研究会 石狩の碑浜益区編調査編集委員会, 2015. 石狩の碑 浜益区編. 石狩市郷土研究会.
- 國學院大學日本文化研究所編, 1999. 縮刷版神道事典. 弘文堂.
- こだま会, 1992. はまます むかしばなし. 浜益村文化団体連絡協議会
- 新村 出編, 1991. 広辞苑第四版. 岩波書店
- 谷内鴻・藤村久和・鈴木藤吉・木滑二郎編著, 1969. 厚田村史. 北海道厚田郡厚田村.

## 6. おわりに

「シリナエの龍神様」は、地域の学校史・絵本に残された伝承であると同時に、現在でも浜益区に存在する信仰の一形態である。一方で、この伝承が実在したか、つまり山火事や関係者の不幸といった事件が存在したのかについては定かではない。

今後、話の中にある「網元もすぐに、つぶれちまった」「かみなりとともに、火柱が上がった」などの事象を事実として確認することができれば、この伝承の現実性と当時の人々にとっての「シリナエの龍神様」の重要性が明らかになることと考えられる。

**謝辞：**現地調査にあたりご助言いただいた佐藤睦氏に深く感謝申し上げます。